

江戸時代日本における天道信仰： 陰陽道の影響を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): Tentō-Faith, Onmyōdō, Syncretism, Kyōkun-sho (textbooks of moral code), Mikuji-hon (the commentary on Mikuji) 作成者: 加藤, みち子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1243

A Study on the Tentō-Faith in Japan during the Edo period: Focusing on the Influence of Onmyōdō

KATO Michiko

Key words

Tentō-Faith / Onmyōdō / Syncretism / *Kyōkun-sho* (textbooks of moral code) / *Mikuji-hon* (the commentary on Mikuji)

Summary

This paper studies the Tentō-Faith in Japan during the Edo period and examines the influence of the Onmyōdō (the Yin-and-Yang philosophy), on it, by analyzing, in particular, the *Mikuji-hon* (the commentary on Mikuji), the *Kyōkun-sho* (textbooks of moral code), and the like, which are widely read even today.

Tentō, a concept that “it is beyond man or, its workings”—a belief prevalent in East Asia—was introduced to Japan during the Ritsuryō era by the Chinese followers of Confucianism. However, in Japan, Tentō (or Ten) is not Confucianism per se, but a *mélange* of several religious thoughts: Shintoism, Buddhism, Confucianism, etc. In previous research on religions in Japan, Confucianism and Buddhism have been the primary subjects. However, from the perspective of the Edo period, the influence of the Onmyōdō cannot be overlooked.

Therefore, this paper examines historical material—that was kept mostly private during the Edo period—to study the influence of Onmyōdō on the Tentō-Faith, and tries to consider its genealogy. First of all, it shows that Tentō—widely accepted in the Edo-period Japan—was an object of faith different from God, Buddha, and Nichirin (Sun as a celestial body). Second, in that period Tentō meant the law of heaven and earth, and this study analyses the *Kyōkun-sho* (textbooks of moral code) and the *Kana-zōshi* (a storybook written in *kana* during the early days of the Edo period) to show that it was related to good luck and

fortune. Third, the genealogy of Tentō as good luck and bad luck, and it being an object of faith related to fortune can date back to “Hoki-Naiden” (the Onmyōdō book considered to have been written during the Nambokutcyō- period).

江戸時代日本における天道信仰

——陰陽道の影響を中心に——

加 藤 み ち 子

江戸時代日本における天道信仰

——陰陽道の影響を中心に——

加藤みち子

〈キーワード〉 天道／陰陽道／シンクレティズム／教訓書／御籤本^{みくじ}

一 はじめに

本稿は、江戸時代日本における天道信仰について、当該時代に広く読まれた御籤本^{みくじ}や教訓書等を手掛かりに、特に陰陽道^①の影響に注目して検討する試みである。

まず、天道につき概略を述べておこう。天道（てんどう、てんとう）とは、日本では律令時代より現在に至るまで長く用いられてきた「人間を越えたもの、又はその働き」を表す観念の一つである。この観念の由来は中国古代の天帝や天に遡り、東アジアで広く用いられてきたことが知られている。日本には律令時代に、儒典である五経を初めとする様々な漢籍によって伝えられた。ただし、日本の場合、儒教の天（ないし天道）とは異なる含意を持った天道の用例がしばしば見られることが先学によって指摘されている。特に戦国時代の武将たちに使用される天道は三教一致的とも称され、その独自性が研究者に注目されてきた。しかしながら、戦国

武將の天道に限らず、我が国における天道の用例を見ると、儒学者と自認する者以外の天道の用例では、儒教の天（ないし天道）とは定めがたい形で用いられていることは多くの個別研究が指摘していることである。⁽⁴⁾つまり、儒教の天（ないし天道）とは異なる、諸教混交的な天道が、人々の思想の上に広く長く展開してきたとみることができるのである。

ところで、天道の諸教混交における「諸教」の内容について、先行研究では従来、神道・儒教・仏教の三教が注目されてきたが、江戸時代の資料から天道を見ると、陰陽道の影響も看過できないのではないかというのが筆者の視点である。江戸時代の天道信仰については、これまで主として儒教の影響を中心に、幕藩体制下の政治思想⁽⁵⁾、そして江戸幕府が官学として採用した朱子学の天観念や江戸期の儒学者の天道について、個別研究が進んでいる。⁽⁶⁾しかしながら、例えば、江戸期民間にみられる民俗行事において、日待・月待^(ひまち・つきまち)と呼ばれる行事や、星辰の動きと関連する天道への信仰が民間社会で流布していたことが知られているが、このような現象からみて、陰陽道との関連を考慮する必要があるように思われる。⁽⁷⁾

そこで本稿では、江戸時代における、儒学者や政治思想家以外の人々の天道観念について、特に陰陽道の影響に注目しつつ検討を試みたい。具体的には、考察の第一として、江戸時代日本において広く受容されていた御籤本に見られる天道が、神や仏や日輪（天体としての太陽）とは異なる崇敬（ないし信仰）の対象であったことを示す。第二に、当該時代の天道は、天地の道理を意味し、吉凶や運勢にも関わる崇敬（ないし信仰）の対象であることを当該時代の教訓書や仮名草子から提示する。第三に、吉凶や運勢と関連する信仰対象としての天道の系譜は、南北朝期に作成されたとみられる陰陽道書『篋篋内伝』^(はききうちでん)などに遡れるとし、当該の天道概念に影響をあたえた陰陽道とは、古代日本の陰陽寮で発展した宮廷陰陽道ではなく、中世日本で、密教僧や神職、民間陰陽師らによって発展した諸教混交の陰陽道思想にあるものと推定されることを述べる。以上の考察を通

して、本稿では、我が国における天道が、陰陽道の影響をうけた諸教混淆の概念であることを提示していく。

二 御籤本と天道

ここでは、江戸時代日本において広く普及していた御籤本に見られる天道⁸⁾が、神や仏や日輪とは異なる崇敬（ないし信仰）の対象であると考えられることを述べる。

まず、少々煩瑣になるが、御籤と御籤本の概要を説明しておこう。御籤本とは、江戸時代に刊行された、「元三大師御籤」⁹⁾の全部で百首から成る籤詩及び、それに対する注解が、一冊乃至上下二冊にまとめられた本のことである。そもそも、日本の神社仏閣で今でも引かれている、いわゆる御籤（おんくじ・おみくじ）の札紙には、五言四句の籤詩とその解説文が書かれており、この籤詩は一番から百番まで百種類で、それぞれ、吉・凶等が配されている。そして、日本全国の寺院（江戸時代にはほとんどの神社も含む）では、基本的に同じ籤札が用いられていた。¹⁰⁾なお、この籤詩は中国で造られた「天竺靈籤」¹¹⁾と同じもの、中国伝来のものであるが、我が国では、平安時代天台宗の僧侶である元三大師良源（九一二〜九八五）が制作したものとされ、「元三大師御籤」ないし「観音籤」と呼びならわされている。なお、元三大師良源には、観世音菩薩の生まれ変わりであるとの伝承がある。江戸時代には、この「元三大師御籤」の全部で百首から成る籤詩とその解説が一冊乃至上下二冊にまとめられた御籤本（元三大師御籤本）と呼ばれる本（図①）が数多く刊行されていた。その種類も豊富であり、現存するものも多い。江戸時代の各家庭に一冊は常備されていた百科全書ともいわれる「大雑書」¹²⁾に御籤本が収録されていることからみても江戸時代の人々の日常生活に、御籤および御籤本がい



図①『観音百籤占決諺解』
貞享四（一六八七）年刊

に密接に関わっていたかが伺われる。

さて御籤本では、籤詩（漢詩部分）に対してそれぞれ和
解（和文による注釈）があり、更に注解や挿絵が添えられ
ている物もある。注解と挿絵の有無については、諸本によ
り異同が有る。¹³ この注解は大きく三つの部分から成り、第
一は総括、第二は事象別吉凶判断、第三に職分別吉凶判断
となっている。そして、この御籤本の注解の総括の部分に、
天道に関する言及が多くみられるのである。¹⁴

以下、御籤本の二つの系統を対照させつつ、いくつか該当部分の用例を挙げてみたい。なお、本稿で使用し
た版本は以下の通りである。（傍線は筆者による。以下同。）¹⁵

A 『観音百籤占決諺解』 貞享四（一六八七）年刊（近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従・参考文献編
十一』勉誠社、一九七七年、所収）

B 『元三大師御闡諸抄』 文化六年（一八〇九）（愛知県立大学付属図書館蔵）
一番

A 此みくしにあひたる人は、てんとうをしんして吉、日待、月待かうしんなとまつへし

B 此みくしにあふ人は、あせいつよく、万人にたつとまるるなり、てんとうをしんし、日待、月待、か
うしんなとしていよいよよし

五番

A 此みくじにあひたる人は、天道をいのり、日まち、月まち、しんめい、八まん、くはんおんなとしん

してよし

B 此みくじにあふ人は、かんなんくらふたへす、信心、陰徳の力にあらされは、叶かたし、天道を祈り、神明、八まん、観音を念して吉

十三番

A 此みくじにあふ人は、天道をまつり、とし神をしんしてよし

B 此みくじにあふ人は、りつしんしゆつせ心のままなり、しかれとも常人には位まけのころあり、天道をしんし、年神をまつりてよし

以上の籤詩の事例から、信じ、まつり、いのる対象としての天道が盛んに登場することが見て取れよう。なお、大野出氏の報告によれば、全百本中八四本で天道が信仰対象すべきものとして挙げられており、御籤本では、「観音籤」であるにも関わらず、全百本注五十本登場する観音菩薩以上の崇敬（ないし信仰）対象として、天道が登場することが指摘されている⁽¹⁶⁾。

それではこの御籤本に多出する天道とはいかなるものであろうか。日待・月待と併記されていることからみて、天体としての日輪（太陽）や月輪（月）とは区別されていると見る必要がある。したがって、ここでの天道は、現代日本語の「おてんとうさま（天道様）」から想定する太陽（お日様）とは異なるものである。また、神明・八幡・観音と併記されていることからみて、いわゆる神道の神や仏教の仏・菩薩とも区別される崇敬対象として扱われていると見る必要がある。それでは天道とはいかなる存在か。御籤本は籤詩の条文についてのシンプルな解説書であるため、本件について御籤本からこれ以上分析することは困難である。そこで次に、同時代に御籤本と同様階層の人々に広く読まれていたと考えられる、仮名草子・教訓書を手掛かりに、検討を進めたい。

三 仮名草子・教訓書の天道

ここで一旦、御籤本を離れて、同時代の人々に広く読まれていた庶民向け仮名草子や教訓書に目を向けてみたい。そこでは、御籤本に見られるのと同じく、神や仏とも日輪とも区別されつつ、並列する崇敬（乃至信仰）対象として天道がよく登場し、しかも御籤本よりは多くの言葉を費やして説明がなされているからである。なお、先取りして言えば、当該資料中の天道とは、天地の道理ないし法則を意味し、踏み行うべき道というニュアンスを持つ崇敬（ないし信仰）の対象であるとともに、陰陽道に関連する概念であると考えられる。このことを、以下の四点から見ていきたい。第一に天（道）に対する祭祀という場合には天（道）の中に天地および日月星辰や神々まですべてを含めるのであり、日待・月待という場合も、天体としての太陽と月ではなく、陽・陰に対する崇敬（信仰）を示す行事であると考えられること。第二に、天道とは、天地の道理（四時変化など）であり、法則であること。第三に、天道は、神や仏というよりも神道・仏道・儒道と同一視される実践の道であること。第四、天道の法則は暦であり、吉凶や運命と関係すること。

まず、天道を拝むとはどういうことを示す記事が、『町人囊』（西川如見、一七一九年成立）にみえるので紹介したい。

天をば天子ならでは祭給ふ事なけれ共、天道にいのり、天を拝む事などは、庶人も憚りなきものなれば、祭ると拝むとは別也。祭るは貴人の振舞する心、拝むは目見得に出る意なり。（中略）天といふ時は日月星辰はいふに及ばず、地も其中にありて、天地神明尽く祭給ふは天子也。（『町人囊』）

つまり、天子の祭（祀）において「天」というときには天地および日月星辰や神々まですべてを含めた祭祀を指すのであり、庶民には、はばかりがある。しかし庶民も「天道にいのり、天を拝む」ことに、はばかりはない。なぜなら拝むというのは貴人や目上の人に会うという作法だからであるというのである。また、庶民（町人）の行う日待・月待について、同じく『町人囊』に以下のような説明がある。

日待・月待をする事、町人に多し。（中略）庶人の身として神明を家内に祭るといへば畏れ至極なる故に、日月によそへ奉りて拝み奉る也。神明は我が国の至尊なれば百姓・町人等の祭るといふ事は非礼なる道理成ゆへ、神明を祭るといはずして、月待・日待といふもの也。日月はいやしき不浄にもやどり給ふことは有り故に、月待・日待といひて、神祭るといはざる也。日月は天の神明にて神明は地の日月なれば、いずれも同じ道理なれ共、日月といふと神明といふとは、今日人の心のうへにおゐて少差別あり。（『町人囊』）

町人が神明を祭るといふと非礼になるから、日月にことよせて（ほんとうは神明を）拝むのであり、日月は天の神明で神明は地の日月であり同じ道理だ、というのである。また、日月はいやしき不浄にもやどり給ふ道理がある、という説明からみて、ここでいう日待・月待の対象である日・月とは、天体としての太陽と月のことではなく、むしろ万象に偏在する陰・陽の二氣を指すと考えるべきであろう。以上を整理すると、「天道日月」と並び称される江戸時代庶民の崇敬（乃至信仰）対象は、天道が天体としての太陽でないことはいうに及ばず、日月も、天体としての太陽と月ではない。天道は天地日月星辰を含む全体であり、日月は万物に遍在する陰陽二氣のことであると理解されていると考えることができる。

次に第二点、天道の定義について、町人向け教訓書『子孫鑑』（寒河正親、一六七三年成立）および、一七世紀成立の仮名草子『仮名性理』（著者不詳、成立年不詳）から見てみたい。

夫天道と云は心信実の理也。是をさとれば、則春夏秋冬の四時の変化して万物生じ草木花咲実なる、日月

のかはるかはる流行、是天道眼前の理也。（『子孫鑑』）

天道とは、天地の間の主人なり。形もなきゆへに、目にも見へず。然ども春夏秋冬の、次第のみだれぬごとくに、四時をおこなひ、人間を生ずる事も、五穀を生ずる事も、皆是天道のわざなり。〔中略〕此天地の間に、有とあらゆるものまで、皆天道のうちに、はらまれて有なり。たとへば大海の内に魚のあるがごとし。魚のひれの内まで、水の行わたらぬと、云事なし。（『仮名性理』）

つまり、天道とは、春夏秋冬の移り行きや万物の生成などの上にみてとることができる天（地）の間の法則であると述べられているのである。単に道理であるにも関わらず、「おがみ」「いのり」とはどういうことだろうか。この点については、黄表紙『天道大福帳』（朋誠堂喜三二、成立年不詳）および仮名字『清水物語』（朝山意林菴、一六三八年刊）に興味深い説明がある。

そもそも天道の御商売と申ハ、善を為すものにハ幸いを与え、惡をなすものに禍いを与え給ひ、仮にも蟲屑偏頗の私なし。…されど、天を怖るる善人も、天道様へ鯛一匹上げた沙汰も聞かず、惡人も追従輕薄をして、内々に上へ通しておいて惡をするでもなし。（『天道大福帳』）

天道と云人は空にありて、人のいふ事を聞きて福を与へ、罪にあわすと思ふ故に。洗米を備へてたらし、餅など進物にして色いろの訴訟を云人多し。たとひ天道有とても、土器の米にめで、餅のかけにめでて私に依怙蟲屑しられんや。人だにも人がましき者はそれにてたらされはせず。いはんや神仏をや。まして天道といひて、一人定まりたる人有にあらず、ただ、道理を指して天道と云。（『清水物語』）

天道は、善をなすものに幸いを惡をなすものに禍を与えるが、天道に「鯛一匹」供えたという話も聞かないというのである。天道の特色は「依怙蟲屑」や「偏頗の私」の無い、「道理」（法則）であるということとは、当該時代の庶民に周知されていたものと見える。

それでは、以上述べてきたような天道と、神道・仏教・儒学とはどのような関係と理解されていたであろうか。『清水物語』および『子孫鑑』に格好の用例があるので挙げてみよう。

夫大將たる御方は、平生天道・神道・仏道もつばら相まもらせ、正道正法、平等大慈悲、ことさら御むよくにして、ものごと御さた御座あるはめでたし云々。（『清水物語』）

先天道・神道・仏道・儒道・歌道・医道、何も信仰之、勿論異国・本朝、聖賢の書籍を学で、正直にして理非分明の上、猶忠信慈悲をもつて、其の家中並百姓町人等にいたる迄、万事つまびらかにさたするはよろしかるへし。∴総じて聖賢の道はいづれも天道にして同事也。（『子孫鑑』）

「天道・神道・仏道」と並び称されるそれは、神・仏のような信仰対象というよりも、ふみ行うべき道、という側面が際立つ。さらに、「聖賢の道はいづれも天道」という記述からは、宗教思想としてのカテゴリーや職業上の振る舞いによる分類を超えた、倫理的行動規範としての天道が浮かびあがってくるといえるのではないだろうか。

以上述べてきたような天道は、神道・仏教・儒教のいずれかの宗教思想として説明することはできない。まさに諸教混交の概念であるが、いかなる思想傾向に由来を持つのであろうか。この点を考える上で参考になるのは『町人囊』にみえる以下の説明である。

天道之式目者、正曆也。曆者則天地之變易也。故曆背者則天地違物也、曆則天神地祇之根源也。人者則万物之靈也、正可守曆也。補闕有余則減之也、故強弱變易而訛者非道、撰方角・吉日・良辰事、則天道也。（『町人囊』）

天道の法則（式目）とは、まさしく曆であり、曆とは天地の變易を指すものであり、天神地祇の根源でもあるという。更に、方角や吉日、良辰の事を撰ぶのはそのまま天道であるという指摘は重要である。日月星辰・

暦を読み解き、天地陰陽の道理を解説する技術は古代・中世以来、陰陽道と呼ばれる技術だからである。それでは、いかなる系統の陰陽道が、近世庶民思想における天道信仰を形成していったのであろうか。この点については、概観のみにとどまるが、中世陰陽道書を手がかりに、可能な限りこの問題を遡及してみたい。

四 中世陰陽道書『ほきないでん簠簋内伝』と天道神

近世において御籤本や、教訓書・仮名草子等に散見される天道は、あくまで法則であり、人格神的存在ではない。天道の式目は暦であり、吉凶や運勢と関連する崇敬ないし信仰対象であると理解されていたことを前節でみてきた。このような意味での天道の系譜とたどると、浮かび上がってくるのが、『祇園社略記』元禄三年（一六九〇）と、陰陽道書『簠簋内伝』の記事である。これらの文献においては、天地自然の順理に則し、旅行・移転・結婚などすべてに大吉とされる方位の神格化されたものが天道神であり、牛頭ごず天王であるとし、これは暦家の説であるという。ここに陰陽道および暦・吉凶・運勢と関連する天道をみてとることができるのであるが、以上の問題について、以下の三点から説明したい。まず『簠簋内伝』とはいかなる書物であり、吉凶と天道に関していかなる記載があるか。次に陰陽道における天道神とはいかなる存在か。そして、天道神が牛頭天王であるということは、本稿の文脈において何を意味するか。

『簠簋内伝』は、現在、鎌倉時代末期か南北朝時代に安倍晴明に仮託されて作成されたとみなされている陰陽道系の暦注書である。²⁰同書は天道神について以下のように述べる。¹⁹

右天道神、牛頭天王也。万事大吉。向此方藏胞衣。鞍置始、一切、所求成就所也。（『簠簋内伝』）

『簠簋内伝』では万事大吉の方位をつかさどる神として天道神を位置づけ、それが牛頭天王であるという。ここで牛頭天王というのは、祇園社にまつられる行疫神である。また、牛頭天王であり天道神である方角は、人間の誕生にまつわる胞衣を納めるのにも、鞍置を始めるにもよいとされる方位であるという。また、牛頭天王をまつる祇園社の縁起を見ると以下のような記述がある。

神家には祇園を素戔鳴尊と称す、仏家には是を牛頭天王となし、曆家には天道神と配す。簠簋内伝、八将神方を挙げて以て牛頭天王の八王子とすなす。又、八行疫神と称す。春夏秋冬及び四土用是なり。『祇園社略記』元禄三年（一六九〇）

ここで天道（神）という概念が、曆家の説と結びついて万事大吉というオールマイティな力もつ神格として位置付けられていることに注目したい。というのは、これは古代以来の伝統的な解釈とは異なるものだからである。平安時代以来の曆家である賀茂家が編纂した暦注書『陰陽雜書』（賀茂家榮撰、一二世紀）にも蔵胞衣^{えな}の吉日として「吉方・天徳・月徳・天道方吉」として、胞衣を埋める吉方として天道がでてくる。しかしながら「万事大吉」という天道神の位置づけは無い。また、『簠簋内伝』および『祇園社略記』で、牛頭天王と天道神が同一視されていることも重要である。斉藤英樹氏が指摘しているように、『簠簋内伝』の陰陽道書としての特色は、典拠となる文献を平安時代以来の陰陽道の権威ある書物から引用するのではなく、同書巻一の記された牛頭天王をめぐる伝承と関連付けて論じるという点にある。²¹つまり、同書における牛頭天王の位置づけはきわめて高いものである。したがってその牛頭天王と同格に天道神を位置付けるといえるのは、独自の解釈であると見ることができる。よって、このような天道（神）の発見ないし再措が近世の天道信仰への契機となっていると考えることもできるからである。

そもそも、古代中国にルーツを持つ、世界の生成を陰陽・五行の気の運動で認識する思考法や、天体の基本

法則を計測する暦法、そして変異な動きをする星から国家社会の動向を予知する天文術・占術の技術に、道教系の呪術や密教經典に基づく秘密修法、神祇信仰における修祓の儀礼などを複合したものが、平安時代日本で発展した陰陽道である²³。山下氏の研究によれば、奈良時代に律令国家の一機関として設立した陰陽寮という官職の外で、職業としての陰陽師が活躍するようになったのが平安時代中期である。『簞篋内伝』の陰陽道とは、古代日本の陰陽寮で成立し発展した宮廷陰陽道ではなく、中世日本で、密教僧や神職、民間陰陽師らによって発展した諸教混交の陰陽道思想である²⁴。したがって、近世の暦や御籤本に見られる庶民の天道信仰には、中世日本で発展した諸教混交の陰陽道思想との関連を想定することができないのではないだろうか。

五 結びと展望

江戸時代成立の御籤本において、信仰対象の第一位を占め江戸時代成立の教訓書・仮名草子にも展開する天道は、当時広く普及していた信仰概念の一つと見ることができる。この天道は、神や仏、あるいは日輪（ないしの神）とは異なる、天地の道理・法則と云うべきものであった。また、天道の式目（法則）は、暦によって読み説かれ、方角・吉日・良辰事をも指し示すことから、御籤を引く人々の崇敬と信仰の対象となり、特に御籤本で多く言及されるようになっていたと考えられる。

天道が以上のような意味・内容をもつものであるならば、そこに見て取れるのは、神道・仏教、儒教などとは異なる、陰陽道の世界観であるといって過言ではなからう。ここでの陰陽道とは、天文・陰陽・日月星辰・暦を読み解く、つまり天地陰陽の道理を解説する技術という意味だからである。そしてこのように陰陽道

の影響を受けた天道観の起源をたどるならば、中世の神道・儒教・真言密教などが交流し、神話世界の大膽な読みかえが進んだ中世に遡ることができないかというのが本稿の暫定的結論である。

なお、江戸時代の御籤には、当時すでに迷信にとらえる批判的な人々もいた⁽²⁵⁾一方で、例えば新井白石（一六五七～一七二五）のような知識人が、娘の婚姻や引越しの行方を、御籤を引いて占っていたという姿が先行研究によって報告されている。⁽²⁶⁾こうした、御籤への真剣な態度は、天地の道理・法則という一見抽象的なものへの崇敬（乃至信仰）という当該時代の人々の思想をうつす鏡でもある。当該時代の天道への崇敬は、運命に翻弄される運命論や、宿命によって支配される宿業観とは一線を画するものとして近世の人々の世界観を形作っていた可能性がある。

ところで、このような天道観念の流布は、当該時代の人々の思惟にどのような影響をあたえたであろうか。何事も「天道次第」と決め込んでなげやりな生き方をする者が登場してきていたことが、たとえば大徳寺の沢庵宗彭（一五七三～一六四六）の書簡から見てとれる。⁽²⁸⁾こうした動向に対応して江戸時代の仏教者たち、たとえば鈴木正三（一五七九～一六五五）や至道無難（一六〇三～一六七六）の唱導説法の中に、天道観念が多くあらわれてくる。⁽²⁹⁾彼らの説法のなかで天道と仏法がどのように関係づけられていくのか、また近世を舞台とした神道・儒教・仏教・陰陽道の交流においてさらなる天道観の進展があるのかなど、論じるべきことは尽きないが、本件に関しては稿を改めて論じたい。

註

- (1) 本稿では「陰陽道」を「天文・陰陽・日月星辰・暦を読み解く、つまり天地陰陽の道理を解説する技術」という意味で用いることとする。陰陽道の陰陽・五行説および天文・暦・占術の技術や世界観は、古来中国にルーツをもつものであるが

「陰陽道」という用語は十世紀以降日本に独自のものである。(小坂眞二「陰陽道の成立と展開」(『古代史研究の最前線』第四卷、雄山閣、一九八七年)、村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房、一九八一年参照。)

(2) 「中国古代の天人相関論―董仲舒の場合―」(溝口雄三ほか編『アジアから考える』(七) 世界像の形成) 東京大学出版会、一九九四年)、片岡龍二「天」の秩序と東アジア思想」(『岩波講座日本の思想』第四卷、岩波書店、二〇一三年)

(3) 戦国時代の天道については、石毛忠「戦国・安土桃山時代の思想」(『体系日本史叢書思想史Ⅱ』山川出版社、一九七六年)、神田千里「戦国日本の宗教に関する一考察」(『東洋大学文学部紀要』史学科編三三、二〇〇八年) 参照。

(4) 三浦梅園、二宮尊徳、佐久間象山、西郷隆盛から夏目漱石まで、近世・近代において数多くの天道の用例が有るが用例・用法は使用者によって異なる。最近の研究では、「夏目漱石における〈罪〉―漱石的〈罪〉と天道思想」(『阪神近代文学研究』一一、二〇一〇年) などがある。なお、十五世紀頃より来日したキリスト教宣教師が、キリスト教の神の翻訳語として一時は天道を採用したという事実も有り、中世後期から近世の日本の宗教思想を考える上では大変注目すべき観念である。キリシタン文学やキリシタン文献における天道については、『邦訳日葡辞書』(土井忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店、一九八〇年) および市井外喜子『天草版平家物語私考』(新典社、二〇〇〇年)、玉懸洋子「天草版平家物語序説―ハビアン抄の方法―」(『仏教大学大学院紀要第三六号』二〇〇八年) 参照。

(5) 江戸時代初頭の天道について幕藩制度の支配原理とするものには、石毛忠「江戸時代初期における「天」の思想」(『日本思想史学』第二号、一九六八年) がある。また、若尾政希「『天道』と幕藩制秩序」(『日本思想史―その普遍と特殊』ベリカン社、一九九七年) では『太平記』の講釈における仁政イデオロギーと国主の天道論について検討している。

(6) 阿部光磨「伊藤仁齋の天道論」(『日本中国学会報』六〇、二〇〇八年) を初めとして、林羅山、伊藤仁齋、中江藤樹、熊沢蕃山ほか、江戸時代の儒学者の天(天道) 観念については先行研究が多く存在する。

(7) 若尾前掲書二二五頁参照。若尾は河内屋可正(一六三六―一七二三) の領主に撫民仁政を要請する天道思想について論じている。「幕藩制の成立と民衆の政治意識」(『新しい近世史』巻五、新人物往来社、一九九六年) また、近年では、深谷克己が農書を中心として江戸時代民間社会の天と神仏について論じている。(深谷克己『民間社会の天と神仏―江戸時代人の超越観念』敬文舎、二〇一五年) しかし陰陽道に注目する先行研究は皆見の範囲ではみあたらない。

(8) 江戸時代に流布した御籤及び御籤本における天道信仰については、大野出「元三大師御籤本の研究」(『思文閣出版』二〇〇九年) を嚆矢とする。筆者は、大野出を代表者とする科研費「社会調査法に基づく寺社における御籤・神籤に関する思想

史研究を中心とした総合的研究」(JSPS科研費JP二二五二〇〇七三)に連携研究者として参加し、本研究につき多くの教示を得た。

- (9) 実際には元三大師御籤に関する御籤本以外にも数種類の御籤本が存在するが、ここでは最も普及していた元三大師に関する御籤本に限定して論じることとした。

- (10) 元三大師御籤以外の仏教系御籤として日蓮宗寺院では『法華経御闡靈感籤』があり、外に黄檗宗の寺院などで別系統の御籤も作られていたことが確認されている。法華経御籤については芹澤寛隆の研究が有る。また現在神社で引かれているおみくじには、和歌が記されている和歌みくじもあるが、これは近代の神仏分離を契機として神社側で積極的に制作されるようになったものである。和歌みくじについては、平野多恵の研究に詳細である。元三大師とおみくじの関係については、宇津純「元三大師とおみくじ」(『仏教民俗学大系八俗信と仏教』名著出版、一九九三年)がある。

- (11) 天竺靈籤については、酒井忠生「中国・日本の籤」(『中国学研究』一二号、一九九三年)参照。

- (12) 「雑書」とは、暦注などに記載された八卦・方位・干支・納音・十二直・星宿・七曜などに記載された吉凶や様々な禁忌をはじめとする各種暦占の解説したもの。「大雑書」とは江戸時代に刊行された和文による大型本の雑書を指す。『寛永九年版大ざつしよ』(国立国会図書館蔵)が現存最古の大雑書である。「大雑書研究序説」(中村璋八『日本陰陽道書の研究』(汲古書院、一九八五年)参照。

- (13) 大野出前掲書(註(8))に詳しいのでここでは書誌学的検討は割愛する。

- (14) 初出『日本思想史学』三三三号(二〇〇一年)、大野出前掲書『元三大師御籤本の研究』収録。

- (15) 御籤本の書誌学的検討、類型分類等は、前掲載の大野氏の著作第三章に全面的に従っている。

- (16) 大野出前掲書(註(8))参照。

- (17) 本稿で取り上げる庶民向け仮名草子および教訓書とは、西川如見(一六四八～一七二四)『町人叢』(一七一九年刊)、寒河正親(生没年不詳)著『子孫鑑』(開板年末詳、一六七三年刊)等である。版を重ねて多くの人々に読まれたと考えられるものを一七世紀後半から一八世紀前半を中心に取り上げた。

- (18) 陰陽とは、中国古代の陰陽思想に基づく概念であり、森羅万象の事象を成立させる二つのカテゴリーである。陰と陽は対立相補する二つの属性を持つ気である。春夏秋冬の四時をはじめとする万物の生成生滅の変化が生じる根源でもある。(村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房、一九八一年)

- (19) 鈴木一馨『靈籙内伝』の陰陽道書としての位置付けに関する検討」駒澤大学『文化』第二三号、二〇〇〇年、中村璋八『日本陰陽道書の研究』（汲古書院、一九八五年）
- (20) 暦注書とは、日時・方位の吉凶禍福・禁忌などが記されており、中国唐代の『大衍曆』に遡り、平安時代以降日本で多数の暦注書が作成されている。（数内清『中国の天文曆法』平凡社、一九九〇年（増補改訂版））
- (21) 『陰陽雜書・陰陽略書・暦林問答集』（『日本陰陽道書の研究』汲古書院、一九八五年所収）
- (22) 齊藤英樹『陰陽道の神々』（思文閣、二〇〇七年）一五五頁
- (23) 山下克明『平安時代宗教文化と陰陽道』岩田書院、一九九六年
- (24) 前掲、註（22）、齊藤英樹『陰陽道の神々』参照。
- (25) 「急に富まんことを願ひ籤を取り占いをして損得を決するなどは、大いに筋なき事成るべし。（中略）即ち天理に背く故にさやうなる籤や占いは必ずたがふものと知るべし。」（『町人叢』）
- (26) 新井白石のエピソードについては、前掲、宇津純「元三大師とおみくじ」参照。
- (27) 運命論とは異なるという点については、前掲、註（4）玉懸洋子「天草版平家物語序説―ハビアン抄の方法―」参照。
- (28) 「御手前萬ごと御才覚慣用に候。先書にも何事も天道次第との御文に候。其分にては候へ共只居て天道より、金銀米錢にても人にあたへたることは無之候。只人々才覚次第にて候。縦は壹石之米を天道次第とて、かたはしから喰果ぬると同物にて候。あとか積キ間敷候。（中略）天道は此法次第のものにて候。天道次第と云事に候へ共尋常之人知事にてはなく候。世上の申天道とは、はるばると違申事候。古今より蓮之葉はまろく、松の葉はほそく候、其ごとく天道之躰は我身の定木にて候。（中略）鶴のまねをからすして、水におはれて死する天道の罰と申す。…此断を不知して、尚々天道くとはかり、人ごとに云て、ねて居ても、天道から喰物を當てこうと思ふ、大きなあやまりなり。世中に居てくるしみをへねはならぬか有様の天道成を、楽をしやうとおもふは、是天道に背也。」（『東海夜話』）
- (29) たとえば鈴木正三の語録『驢鞍橋』や至道無難の語録『自性記』には以下のような文言が見える。「一日、去醫者來て修行の用心を問。師示曰、別に用心なし。醫者の仕様を教ふ申べし。先我は、世界の病人を救ふとの天道の仰付也。此役人ぞと思ひ定め、身心を世界に抛て、薬代のことをも何事も不思、只天道に任せ奉り、一筋に醫を施さるべし。然らば亦命をつなぐ分は、必ず天道の擬有べし。如是勤められば、機の熟するに随て、必ず徳あるべし」（『驢鞍橋』）、「心は神と云、天道と云、佛と云、三國にわたり、言は別にしてもと一躰也。こは直に性のた、しきをいふなり。無一物になりたるときのこと

なり。凡夫のあやまりこゝにあり。無一物ならは見聞覚知あるましとおもふ。聖人は見聞覚知直に無一物なり。こゝをよく心得へき事也」(『自性記』)。

参考資料

- ・「観音百籤占決諺解」(著者不詳、貞享四・一六八七年)(近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従・参考文献編十一』勉誠社、一九七七年)
- ・「元三大師御闡諸抄」(著者不詳、文化六・一八〇九年)(愛知県立大学付属図書館本、『元三大師御籤本の研究』思文閣、二〇〇九年)
- ・「子孫鑑」(寒川正親著、寛文二三・一六七三年、国立国会図書館本)
- ・「清水物語」(著者不詳、寛永一五・一六三八年、早稲田大学蔵本)
- ・「町人囊」(西川如見著、享保四・一七一九年)(中村幸彦編『日本思想大系 五九 近世町人思想』岩波書店、一九七五年)
- ・「天道大福帳」(著者不詳、天明元・一七八六年、早稲田大学蔵本)
- ・「簠簋内伝」(続群書類従本)(『日本陰陽道書の研究』汲古書院)
- ・「陰陽雑書」(『日本陰陽道書の研究』汲古書院)
- ・「祇園社略記」(『神道大系・祇園』神道大系編纂会)
- ・「東海夜話」(書簡)(沢庵宗彭著、駒沢大学蔵本)
- ・「沢庵和尚全集」復刻、日本図書センター、二〇〇一年)
- ・「驢鞍橋」(鈴木正三全集)上・下、鈴木正三顕彰会、二〇〇六年)
- ・「自性記」(至道無難著、寛文二二・一六七二年)(『至道無難禪師全集』、春秋社、一九六四年)

※本研究は、JSPS科研費J P 一五K〇二〇九五の助成による研究成果の一部である。

(武蔵野大学特任教授 博士(哲学)、中村元東方研究所主任研究員)